

D-2 スカルノ体制

375. シャフリルの登場

1945年8月17日にインドネシアが独立を宣言して直ちにスカルノとハッタは大統領と副大統領に選出された。その後1967年にスハルト大統領に交代するまでスカルノが大統領であったため、20年強の間スカルノ体制が継続したように錯覚しがちである。

独立戦争の間のインドネシアの元首はスカルノ大統領であったが、実際の政治の指導者はシャフリル首相であった。シャフリルは政争に敗れて1947年に政権を降りたが、シャフリルの築いた枠組みは1959年の“1945年憲法”復帰まで続いた。従ってその間はシャフリル体制というべきで、スカルノ体制なるものはスカルノ大統領統治下の終わりの1950年代後半から60年代前半の約10年にすぎない。

シャフリルが憲法に規定のない首相に就任し、新生インドネシアの政治を主導しシャフリル体制を築いた経緯は次のとおりである。

独立宣言をへて発表された新政府の閣僚名簿のほとんどはスカルノ/ハッタと行動を共にしてきた独立準備委員会(→313)の幹部であった。スカルノ/ハッタはインドネシア国内では支持されていても、勝利者として戻って来た連合軍にとっては大統領から閣僚にいたるまで対日協力者でしかなかった。また国内でも新生インドネシアの指導者に対し、青年グループ(→315)やタン・マラカ(→295)など左派がアウトサイドにいた。

そこへ彗星のように現れたのがシャフリルである。シャフリルはオランダ留学当時からハッタとともに民族主義運動を行ってきた。戦前はオランダによってハッタとともに逮捕され、流刑にされた。日本軍が占領し協力を求めた際に、ハッタは日本の要請に応じたがシャフリルは結核病を理由に対日協力を一切拒否し、日本の占領中は政治活動から隠退していた。

シャフリルは西欧の法学教育を受け、社会主義への傾斜はあるものの議会制民主主義の信奉者であった。オランダに話し合い拒否の口実を与えないため、スカルノ大統領は西欧に通じたシャフリルを起用した。仕掛け人はハッタであろう。

1945年11月、大統領布告でもって大統領内閣制は議会制民主主義の議員内閣制に変更された。1945年憲法に議員内閣制は記されていないから超法規処置である。あらゆる政治活動分野から指名された中央国民委員会が暫定議会の役割を果たした。

新制度にのっとりシャフリル自ら首相となり、対日協力者を排除した内閣の閣僚の多くはシャフリルの率いる社会党から起用された。シャフリルの政権奪取はクーデター¹まがいであったが、オランダから戦争犯罪人呼ばわりされていたスカルノ大統領はシャフリルの行動を座視せざるをえなかった。

⇒444.シャフリル首相

¹ シャフリルは独立準備委員会にも参加しなかった。また独立宣言の際にジャカルタに滞在していたが関与していない。1906年生まれシャフリルは30歳代、40歳代のスカルノ・ハッタより少し若く、青年グループの橋渡し世代である。シャフリルは中央委員会の下部機関に常任委員会を設け、シャフリル系の人員を委員に任命し国政を運営した。シャフリルの専断にスカルノ大統領は傍観せざるをえなかったが、ハッタ副大統領の支持はあったものと思われる。

376. シャプリル体制

インドネシアは独立宣言を發したが、折りから戻ってきたオランダにとってインドネシア独立などは悪漢日本の使い走りが演じた「真夏の夜の夢」であるとしか認識しなかった。意気軒昂のインドネシアと傲岸不遜のオランダの間の衝突は独立戦争に拡大したが、オランダの武力の前にインドネシアは圧倒されて独立は危なげであった。

インドネシア国内では悲願の独立を達成するため、とりあえずオランダがのめるジャワ島とマドゥラ島に限定するのもやむをえないとする〈外交派〉と呼ばれる穏健派と、全領土の完全独立をめざす〈闘争派〉と呼ばれる強硬派が対立していた。時の指導者シャプリル首相は外交派であり、スカルノ/ハッタはシャプリルを支持せざるをえなかった。

独立戦争の最中の1946年6月末にシャプリル首相ら外交派の政府要人が何者かに拉致されるという事件があった。この事件は外交交渉に不満を抱くタン・マラカ(→295)の闘争派がシャプリル首相から権力の奪取をはかったとされる。

事件を理由に和平交渉に反対しそうな政治家も含めて闘争派は7月3日に全て逮捕され、以後、シャプリルの親西欧路線がインドネシア政治の主導権を握る契機となった。拉致に関わる7月3日事件には謎が多く、反対派の一掃を狙った政府側の謀略という説が有力である。

シャプリル首相が当事者となってオランダとの和平交渉に臨み1946年11月にリングルジャティ協定(→325)が締結された。しかしシャプリル路線はオランダに対して軟弱であるとして国内の反発が厳しかった。

スカルノ大統領はシャプリル首相を擁護したが、政争の中でシャプリルは退任せざるをえなかった。代わって登場したシャリフディン首相(AmirSjarifuddin1907-48)もオランダとの交渉ではさらに後退したレンヴィル協定を受けざるを得なかった。

ちなみにシャリフディンはメダンに生まれ、1933年にジャカルタの法学校を卒業、弁護士を開業するかたわら反ファシズム運動に投じた。日本軍政中に逮捕されたが、スカルノらの助命乞いで危うく一命をつなぎとめた。独立後、シャリフディンはシャプリルとともに政界で頭角を現し、情報相、国防相、首相の要職を占め、オランダとの協調路線を推進した。1948年初めシャプリル派と対立し、8月に共産党の大立者ムソが亡命先のソ連から帰国するや、彼に歩調を合わせ、マディウン事件(→326)の武装決起に身を投じ処刑されるという数奇な運命をたどった人である。

シャプリルが首相を降りた後も、スカルノ大統領は外交顧問として彼を重用した。シャプリルは国連を活躍の場にしてインドネシア独立の支持を得るために尽力をつくした。国際世論においてインドネシア独立が理解されたのは西欧民主主義思想に親しんだシャプリルの広報活動の成果である。しかし独立戦争が終わり、スカルノ大統領が名実ともに実権を掌握すると西欧派のシャプリルは相容れない政敵となり、国家の裏切り者と糾弾され亡命先で客死した。

377. 第1回総選挙

1949年にハーグ協定(→330)によって独立戦争を終え『インドネシア連邦共和国』として発足するにあたり新しい憲法が暫定制定された。いわゆる『1950年憲法』は西欧の議会制民主主義に基づくものでシャプリル

体制の追認であった。

独立戦争の間は政党や団体の代表が中央国民委員会議員に指名されて国会機能を代替していたが、ようやく総選挙が可能となった。1955年9月のインドネシア独立後初めての総選挙はバンドゥン会議(→458)成功の余勢をかって行われた。

広大な地域、多様な民族・宗教をバックに政党は乱立しお互いに足を引っ張りあった。選挙の結果、約30の政党の中で、①インドネシア国民党(→293)22%、②イスラム教系マシュミ(→419)21%、③イスラム系 NU(→419)18%、④共産党(→381)16%、の4党が多数政党となった。

①インドネシア国民党は戦前にスカルノが民族主義者の大同団結で組織化した。スカルノ等党首脳逮捕で1931年に解散したが、独立後スカルノ大統領の与党として復活した。

イスラム教政党は改革派の②マシュミとジャワを基盤とする保守派の③NUに分裂した。スカルノ体制にとってマシュミは野党であり、NUの党内事情は複雑であったが一応は与党であった。

マディウン事件(→326)で一時は政権から排除された④共産党は復活した。スカルノ大統領に擦り寄ることで中央国民委員会の増員で割当てを受けて次第に勢力を盛り返した。大政党の一角に食い込むほどの勢力を得たのに意外感があったが、知識人や宗教人による既成政党が草の根にいたる日常活動に欠いていたことを露呈した。

シャプリルの率いたインドネシア社会党(PSI)は都市知識層の支持はあったものの選挙では全国に浸透していなかったため惨敗に終わった。党名は社会党であるが、西欧的議会制民主主義を綱領としていた。

タン・マラカ(→295)の流れをくむムルバ党はスカルニ、B.M.ディア²、ハエルル・サレ、アダム・マリク(→447)などの著名な政治家を擁し民族社会主義を唱え、都市知識層の支持を得、共産党とは一線を画していた。しかし共産党との抗争に破れ選挙では惨敗であった。その後1964年には共産党と対立したことから活動を禁止された。

選挙で選出された議員であるが、国会とは政党間の離合集散の場であり、特に地方代表は地方エゴイズムむき出しで妥協の姿勢がなく、政局運営はより困難になった。政党は党利党略に明け暮れた。

支配政党の存在しないことが政局を不安定にし、スカルノ大統領の存在を優越的にする中で共産党の党勢拡大に伴い大統領の左傾化が進展した。インドネシア独立を共に戦ったハッタ副大統領³は1956年、副大統領を辞して政界から去った。スカルノ大統領の独裁化と容共化に危惧を抱くハッタ副大統領は受け入れられなかった。その後もスカルノ大統領とよりを戻すことはなかった。

378. 地方の反乱

インドネシアはオランダの企てた連邦制を解体し、1950年、民族主義者の念願の単一共和国になった。ようやく完全独立を手にしたが、足元のインドネシア財政基盤は脆弱^{ヘイジヤク}そのものであった。ジャワ島は貧しかったが、スマトラ島やスラウェシ島の外島には輸出できる資源があった。インドネシア経済は外島の資源に依存せざるをえなく、貧しいジャワ島が豊かな外島にもたれかかる構造であった。

² Burhanuddin Muhammad Diah (1917-)はアチェ出身、「ムルデカ」誌の創設者。アンタカン・ムダ以降。独立革命の活動家。シャプリル⇒スカルノ⇒スハルトの政変の中で終始、陽のあたる場所に居続けた。

³ 独立戦争間のスカルノ大統領はハッタ副大統領のロボットであり、「ハッタのジョンゴス(下男)」とさえいわれていた。完全独立達成後、ようやくスカルノ大統領の独自の政治路線を主張するようになったが、ハッタの受け入れられるものではなかった。

1956年、単一共和国に亀裂ともいふべき反乱が生じた。軍内部の権力抗争に敗れた国軍の幹部が地方に戻って地方軍閥化し、中央からの締め付けに反発したものである。ルビス(Zulkifli Lubis 1923-) 将軍はスマトラ島に帰り、ジャワへの反発を吸収するべく政府に対して公然と叛旗をかかげプルメスタ⁴(Permesta)を組織した。

政治家に働きかけてブキティンギ(→098)にシャフルディン・プラウィラスガラ⁵を首班とする新政府を宣言した。1958年2月、インドネシア共和国革命政府⁶(PRRI)の樹立を宣言したことからPRRI/Permestaともいわれる。反乱はジャワ島支配に対する外島の武力による反抗であるが、当時共産党に傾斜して独裁化の傾向が著しかったスカルノ大統領に対する批判でもあり、ハッタ副大統領の辞任⁷と同じである。

プルメスタの反乱についてはアメリカCIAの謀略説⁸が定説である。左傾化するスカルノ大統領に不信をいっていたCIAはカルテックス(→535)が持っているスマトラ島の石油資源に関心をもち、スカルノ大統領の影響を排除したいと考えた。反乱軍のプカンバル(→091)占拠はCIAの後ろ盾があった。

プルメスタの反乱は西スマトラを主要舞台とし各地に拡大した。反乱に同調したアチェ(→083)は独立戦争における貢献にもかかわらず北スマトラ州に併合されたことに不満があった。アチェの場合は宗教と歴史におけるアチェ民族の独自性を主張し、アチェ州の分離独立を要求してたち上がったものでPRRIとは動機がズレていた。従ってアチェは特別州として他州と異なる自治権を得ることによって収拾された。

スマトラ島以外にプルメスタに連携してたち上がったのはスラウェシ島のマナド(→208)である。コプラ等の輸出で潤うべき富がジャワ島へ吸い上げられることへの反発である。政府軍は1958年2月に反乱軍の拠点のマナドを爆撃し、6月に占領した。最終的に北スラウェシの抵抗が終わったのは1961年である。

軍中央は空軍による実力攻撃によって地方軍に対して軍事的に優位にたった。スカルノ大統領は没収したオランダ資産の農園などを軍中央に与えた。軍中央は地方軍の権益を認める懐柔策でもって反乱した軍幹部にインドネシアへの忠誠を誓わせて一件落着になった。地方の反乱の平定によって国軍の権力基盤が増したことが、9月30日事件(→384)をへてインドネシアが軍事国家になる温床であった。

プルメスタの反乱は反中央という点において日本の明治維新後の佐賀の乱や西南戦争に相当するものであろう。

379. 指導される民主主義

総選挙後の国会の混迷に国民は嫌気がし、政党病と地方主義は国の存在を脅かすものと危惧された。結局、シャフリルの持ちこんだ1950年憲法に基づく議会制民主主義はインドネシアに政情の混乱と無秩序をもたらしただけであるという反省から現状打破のためスカルノ大統領のカリスマ性への期待がいやが上にも高ま

⁴ プルメスタ=Permesta は全体闘争(Perjuangan Semesta)の略称である

⁵ シャフルディン・プラウィラスガラ(Syafruddin Prawiranegara 1911-)はバンテン出身で西洋教育を受けたインドネシア銀行初代総裁などを努めた経済専門家である。独立戦争当時はブキティンギに非常時内閣を作った。1958年の地方の反乱においては反乱政府の首相になった。スカルノ体制下の1966年までは牢獄にあったが、釈放後はスハルト体制の批判から50人委員会に加わっている。

⁶ インドネシア共和国革命政府(Pemerintah Revolusioner Republik Indonesia)にはスカルノ大統領の容共政策に抗議しナシール、スミトロ・ジョヨハディクスモ、ブルハヌディン・ハラハップなどの社会党やマシュミ党の幹部も加わった。60年5月首都をマナドに移しインドネシア統一共和国を宣言したが、61年中央政府によって鎮圧された。

⁷ ハッタ副大統領と地方の反乱の関係は明らかにされていないが、ハッタが地方の反乱の黒幕という見解もある。

⁸ 鄒梓模著「スカルノ大統領の特使」に当時のインドネシア、米国、日本の外交関係の裏話が記載されている。

った。

スカルノ大統領はインドネシア在来の叢知としてゴトン・ロヨン(→593)を強調した。【50%+1】が正義であるという多数決の原理はインドネシアでは生理的に受け入れられない。家族主義(→573)のインドネシアでは物事はムシャワラ(→594)によってムファカットというインドネシア流のやり方がある。インドネシアにとって西欧の議会制民主主義は馴染まない、としてインドネシア流の民主主義として“指導される民主主義”を唱えた。

名実共に“独立の父”であることを自認するスカルノ大統領は自らを政党を超越する存在として意識していたが、民主主義とは自分が指導⁹すべきものと次第に昂揚し、自らを英知ある指導者であるとして一步一步独裁者への道を歩み始めた。

大統領の提唱する“指導される民主主義”は議会制民主主義の否定であり、内外から批判が相次いだ。自由主義陣営からはスカルノ大統領の左傾化とからみ批判が厳しかった。

国内ではシャプリルの率いるインドネシア社会党とイスラム教近代派のマシュミ党(→419)が議会制民主主義に固執した。このため両党はスカルノ大統領に疎^{うと}んじられ、さらに地方の反乱に連座して1960年に政党の活動を禁止された。

ミナンカバウ人(→609)は民族主義運動においてハッタ、シャプリルの人材を出し、インドネシア独立に多大の貢献をしたが、地方の反乱を契機にスカルノ陣営から遠ざけられた。ハッタ副大統領の辞任をスカルノ大統領は引き止めなかった。「ハッタなしでもインドネシア革命はできた、スマトラ島を引き止めるためにハッタに居てもらっただけだ」と開き直った。

1959年、大統領は1945年憲法への復帰を唱えたが、改憲に必要な2/3の多数を得られなかったため、議会を解散し大統領布告で45年憲法へ復帰した。超々法規処置でいわば大統領のクーデターである。憲法が国会の正規の手続を得ていないという瑕疵^{かし}はスハルト体制崩壊まで継続した。

政党は国民を代表していないとして国会を解散し、代わりに職能集団を編成した指名議員が取って代わり、ゴトンロヨン国会と名づけた。これとともにスカルノ大統領の独裁化が始まり、ついには1963年終身大統領になり、1965年の9月30日事件(→384)で頓挫するまでスカルノ体制は続いた。指導される民主主義の行き先は独裁制であった。

スカルノの築いた職能集団はスハルト体制によりゴルカル(→393)として強化された。スハルト体制はスカルノ体制の否定が出発点であったが、指導される民主主義などの家父長制的権威主義はスハルト体制によって踏襲された。

→440.独裁者/スカルノ大統領

380. ナサコム体制

⁹ 独立前の民族意識の高揚していた頃、チプトマングクスモとスタットモ・スルヨウクスモが民主主義について論争した。前者は人民の政治主体としての自立により国家の再生が可能である、と主張した。対して後者の主張は民主主義とはパンデイトに教導されてはじめてジャワ再生のエネルギーに転化できる。「英知を伴わない民主主義は災禍をもたらす」というものである。スカルノの“指導される民主主義”、スハルトの“パンチャシラ民主主義”はスタットモ・スルヨウクスモの線上に連なるものである。
⇒白石隆「インドネシアから考える」

1960年代のスカルノ大統領の政治指導原則をUSDEKとして宣伝に努めた。USDEKとは①Undang-undang 1945(1945年憲法)、②Sosialisme a la Indonesia(インドネシア社会主義)、③Demokrasi dipimpin(指導される民主主義)、④Ekonomi dipimpin(指導される経済)、⑤Kerpribadian Indonesia(ナショナル・アイデンティティ)のシンカタン(省略形)である。

スカルノ大統領の末期の政治構造はナサコム体制といわれた。ナサコム(Nasakom)は民族主義(Nasional)、宗教(Agama)、共産主義(Komunizumu)の略語である。具体的にはインドネシア国民党(→293)、NU(→419)、共産党(→381)を与党とするスカルノ大統領支持の政治勢力を意味した。

ナサコムの思想の原点はスカルノの青年時代にさかのぼる。25歳の時の論文『革命の旗の下に』においてスカルノは反植民地勢力を結集し、国民党結成を図るために言い出したものである。その論旨はインドネシアの悲劇は目的が同じであるにもかかわらず、民族主義者、イスラム主義者およびマルクス主義者の三者に運動が分派していることを指摘し、三者が一団となって協力していく必要を強調した。ナサコムとは独立前のイデオロギーを復活させて政治スローガンとしたものであった。

ところでナサコムにおけるスカルノ大統領の位置づけであるが、大統領はこれらの三者を超越して君臨するものであったことにジャワ伝統のワフユ(→706)が息づいていた。終身大統領の称号を得、実質は国王のつもりであった。

しかし大統領を支える三者は本来は相容れない対立政党であり、ナサコムの実態は妙なバランスの上に乗っかるかなり危うい状態であった。ハッタは“三本足の馬”と皮肉った。

イスラム政党では野党的立場に固執するマシュミ(→419)はスカルノ大統領に忌避されて禁止された。ジャワ色の濃厚な NU のみが与党であった。しかし中部ジャワ・東部ジャワの末端では NU と共産党は農地解放をめぐる死闘を続けていた。

民族主義を信条とするインドネシア国民党は政界の正嫡子でありスカルノ大統領の本来の与党であったが、幹部は貴族化していた。党内の反共派は共産党の圧力によって次第に弾かれ、国民党は政党としての活力と主体性を失っていた。



アフマッド・ヤニ将軍

国軍は政党とは別に独自の勢力を築き民族主義の牙城を誇っていた。軍人でないスカルノ大統領はナサコムという三者連合の政党連合によって国軍の勢力に対抗せざるをえなかったともいえる。

国軍の実力者であり政治に対して一家言のあるナスティオン将軍(→448)は敬遠され、一本釣りされたヤニ(Ahmad Yani)将軍¹⁰が大統領のお気に入りであった。

大統領によって軍組織は揺さぶられていた。軍幹部は独立戦争時のマディウンの反乱(→326)の苦渋をなめたことによって身についた反共思想から共産党の増殖を憂慮していたが、軍の下部組織にも共産党は浸透していた。軍の中でも歴史が浅く政治基盤のない空軍はスカルノ大統領と共産党に擦り寄った。



スバンドリオ外相

スカルノ大統領を取り巻くスバンドリオ外相¹¹などの政治家や軍人が大統領官

¹⁰ Jenderal Anumerta Ahmad Yani 1922年6月19日プルブレジョ生まれ(スハルトの1年下)。SMA2年中退であるが義勇軍に入る他、独立後は米国司令・参謀連合カレッジで学んだ。中部ジャワ反乱では Banteng Raider を組織し活躍、1958年のスマトラ・スラウエシを拠点とするインドネシア革命政府の反乱を鎮圧でも活躍し陸軍参謀長に任じられた。9月30日事件で拉致され殺害された。

¹¹ スバンドリオ(Subandrio 1914-)はスカルノ大統領に引きたれられて外交官から外相になり、スカルノ大統領の側近として西イリアン解放、マレーシア対決の外交政策を担った。共産党寄りであったため、9月30日事件で死刑を宣告された。

邸やデヴィ夫人(→363)邸で歌を歌ってうつつを抜かしている間にジャワ農村には共産党が蔓延^{まんえん}していた。ナサコム体制とは共産党に籠絡^{ろうらく}されたスカルノ独裁体制のことであった。

381. 共産党の跋扈

インドネシア共産党(PKI)は独立前の1926年に蜂起事件(→288)、独立戦争の最中のマディウンの反乱(→326)と味方陣営を裏切る前歴¹²が二度もあった。それにもかかわらずスカルノ体制の中で再び共産党は復活した。

1955年の総選挙に続き、1957年の地方選挙でも共産党の進出は目覚しかった。特に中部ジャワと東部ジャワでは第一党になった。1954年第5回党大会時16.5万人の党員は、1959年150万人、1962年200万人、1965年には300万人の党員と2000万人のシンパがいた。300万人の党員数はソ連と中国に次ぐ数で、非共産圏では最大である。

スカルノ体制のインドネシアに共産党が受け入れられた理由は、

- ① ジャワのゴトン・ロヨン(→593)の伝統社会には共産党をユートピア的な共同社会として受け入れる土壌があった。
- ② 資本主義の植民地時代の苦い記憶に対して当時の世界の勢力バランスでは資本主義のアンチテーゼとしての共産党がバラ色に見えた。
- ③ 共産主義の無神論は巧みにカムフラージュされていたのでアバンガン(→631)には抵抗がなかった。

共産党はジャワ農村での活動で借金に苦しむ貧農に低利の貸付を行い、地主から取り上げた農地を貧農に与えることによってアバンガンにその支持基盤を拡大した。農地解放に抵抗する地主層はサントリ(→630)でNU(→419)支持者であったため共産党とNUの暗闘が続いた。このことは9月30日事件後に共産党員の大虐殺事件へと繋がる。

勢いに乗る共産党は軍に政治委員を置き、労農武装の人民軍の設置を唱えた。陸軍、海軍、空軍、警察の四軍に対し、共産党の人民軍を第五軍とするもので中国は武器供与を約束した。共産党の武装構想に対して国軍は警戒を高めた。

宗教勢力とも国軍とも敵対関係が深まる共産党は独裁者スカルノ大統領の新体制運動に協力する形で勢力を伸ばした。スカルノ大統領が議長として主宰する国民協議会の副議長にアイジット議長、閣僚に共産党はルクマンとニョト2人の閣僚を送りこんだ。

革命にロマンを求め、革命を生きがいとするスカルノ大統領は共産党にのめりこみ、共産党はスカルノ大統領を抱き込むことにより両者は一心同体化しつつあった。

国際的には米ソが平和共存を模索する中で中ソ間に亀裂が生じ、中国が共産党陣営の別働隊としてのし上り、インドネシア共産党はソ連から中国に軸足を移動させた。

勢力の最盛時におけるインドネシア共産党はスカルノ大統領の主導するナサコム体制の一翼を担い、国

¹² インドネシア共産党は1920年代からサルジョノ派と民族主義のタンマラカ派に分裂していた。サルジョノ、ムソはイスラム同盟左派の出身で1926-7の反乱事件を指導して党を壊滅させた。独立後、ムソは再びマディウン事件を起こし多くは殺害された。その後のインドネシア共産党の主導権を握ったアイディットなどは民族派の系譜である。

軍の中にも食い込み、海軍、特に空軍では陸軍への対抗意識から共産党への傾斜が見られた。

当時の世界情勢からインドネシアが平和裏に共産化することも有りうると見られていた。その共産党の前に立ち塞がっている大きな壁が陸軍(=国軍)の幹部であった。

⇒446.アイディット議長

382. 国軍との距離

独立当時の政党政治家は国内やオランダの大学出身者であり、彼らは外国語も話せるインテリであった。これに対して独立戦争を戦った国軍の幹部は一般に中学校卒でペタ(→309)出身の軍人であり、インドネシア語とジャワ語しか話せなかった。

軍人は政治界では二流とされたが、インドネシア独立はスディルマン将軍(→328)指揮下の国軍兵士の血によって^{あがな}購われたという自負心から政治に関与してきた。軍人の政治界への進出は後に二重機能(→373)として正当化された。

政党の幹部と比べ国軍の幹部は年齢も一回り若い。自然発生的な軍内ヒエラルキーで最高司令官は軍人が互選で決め、政治家の介入を拒み国軍自体が政治勢力となる兆しを示した。しかし一旦、独立達成後は財政負担から国軍は縮小が求められた。

1952年の「10月17日事件」は国軍が戦車を動員してウィロポ(Wilopo)内閣の国軍合理化計画に異議を唱え、内閣を恐喝した事件である。ナスティオン陸軍参謀総長(→448)は事件の責任を負って解任された。

その後、起きた地方の反乱は地方軍閥化した地方師団が中央の統制を嫌い、それに政治家が乗ったものである。軍中央は1945年憲法とパンチャシラ(→365)を錦の御旗とし、反乱を鎮圧し国軍の参謀本部の下に一元化した。政府は地方の反乱鎮圧には軍中央に依存せざるをえずナスティオン将軍は復権した。スカルノ体制の対立軸は政治家と国軍の綱引きの時代でもあった。



ナスティオン将軍

スカルノ大統領のインドネシア統一において国軍は地方統制を実現した権力主体であった。国家財政の不足から軍の資金源としてオランダ没収資産の管理が国軍に委ねられた。資金の確保とともに国軍上層部将軍連中の退官後の行き先ができた。

インドネシア統合という観点からは国軍とスカルノ大統領は同舟の同士であった。スカルノ大統領が指導される民主主義を唱えて議会を^{やっかい}厄介もの扱いし国策決定から排除することを軍は黙認した。軍は政治からの不干渉の慣例を作り、巨大な存在になった。

イリアン奪回を唱えるスカルノ大統領のトリコラ(→432)に国軍は全面的に協力し、1961年12月、スカルノ大統領はイリアン解放国民総動員令を号令し、マンダラ作戦と名づけた。指揮官は後の大統領のスハルト少将である。

インドネシア不退転の決意の下で国軍はオランダとの小競り合いを優位に進めた。オランダはアメリカの圧力に屈し、インドネシア念願のイリアン奪回に成功し、国軍のステイタスも高まった。しかし引き続いてスカルノ大統領が唱えたマレーシア粉砕にはナスティオン将軍などの国軍幹部は慎重な態度を示した。

スカルノ大統領は国軍の巨大化を恐れ、対抗勢力として共産党を鼻^{ひいき}負し、海軍、空軍、警察を陸軍と対等の別組織にして陸軍牽制を行った。

大統領存命中は大統領のカリスマ性でもって国軍と共産党の両勢力のバランスを取れても大統領がいなくなれば破綻^{はたん}は必至の状況であった。

383. スカルノ体制の破綻

バンドゥン宣言(→458)を威光にインドネシアはイリアン帰属問題(→432)でオランダに激しく迫った。しかしオランダはインドネシア領土編入を拒否し両国は断交し、インドネシアはオランダ資産を没収した。バンダ海でオランダ艦隊と小競り合いの戦闘が発生した。

1962年8月、アメリカの斡旋で国連の調停が成立し、1963年5月、イリアンはインドネシアに移管された。この時点でアメリカがスカルノ大統領に友好的であったのは、当時のケネディ大統領は米ソの対立構造の中でインドネシアを自由主義陣営に引き止めようとした。

ケネディ大統領が没して後はアメリカとの関係は急速に悪化した。スカルノ大統領によって左傾化するインドネシアに対して自由主義陣営の眼差しは批判的であった。

インドネシアとしては念願のイリアン奪回で独立戦争は目的を達した。次は戦時経済で荒廃した経済の復興による国力の強化に取り込まねばならなかった。しかし政治優先のスカルノ大統領は永久革命を唱え、革命にロマンを求め独裁化に突き進んだ。

そこへ格好の口実としたのは隣国のマラヤ連邦がシンガポール、サラワク、サバ、ブルネイを併合するマレーシア構想である。マレーシアを英帝国主義の温存であるとのしり、1963年9月、マレーシア発足にあわせ、マレーシア国境に部隊を集結させた。

スカルノ大統領はマレーシア支持を表明した米国¹³にたいしても反米を煽り、先鋭化した労働組合が英米系資本の農園の不法接収を黙認した。海外の自由主義陣営からの援助は途絶えたが、「米国の援助なんかくそ食らえ」と嘲^{あざけ}った。戦時賠償(→362)という特殊な関係の日本のみが自由主義陣営との繋がりであった。

インドネシアの意に反してマレーシアが国連の非常任理事国になるや国連を脱退し、当時は国連に入っていなかった中国とともに第二国連の創設を図った。【北京＝ハノイ＝ピョンヤン＝ジャカルタ枢軸】は西欧のみならず反ソをも意識した挑発であった。

外国企業(西欧資本)の接収によってインドネシアの経済活動は停滞し、接収を免れた外国企業も撤退していった。外島は密輸にはしり、正規の貿易は途絶えた。

インフレは天井知らずの高進を続け、1965年は600%のインフレでインドネシア経済は破綻に向った。

独裁者スカルノ大統領には健康不安が付きまとい、動脈不整脈で倒れた。例年、スカルノ大統領は独立記念演説(→974)に精根を傾けたが、1965年の独立記念演説は原稿数枚が読み飛ばされ、気力の衰えが見られた。中国の派遣した医師から特別の情報を得ていた共産党はスカルノ大統領の高まる健康不安^{あせ}に焦り

¹³ 当時の日本は池田首相・佐藤首相であり、スカルノ大統領に親しい川島正次郎副総裁がインドネシア外交を仕切り、米国をなだめてインドネシアとマレーシアの和解工作に努めたが失敗に終わった。⇒鄒梓模著、増田与編訳「スカルノ大統領の特使」

スカルノ大統領はネコリン(Nekolim)という用語を作り英米を罵倒した。ネコリンはNeokolonialisme(新植民地主義)、Kolonialisme(植民地主義)、Imperialisme(帝国主義)のシンカタンである。

インドネシア専科

でした。

国軍は共産党の影響力が増して行く大統領に愛想をつかし面従腹背を行うようになるも、大統領のカリスマ性の呪縛じゅばくから抜け出せなかった。宮廷政治の裏では共産党と国軍の鏢つばせりあいの軋む音が高まり、そして勃発したのが9月30日事件である。

⇒384. 9月30日事件